

OfByForコラム 地域の 地域による 地域のための Something NEWS

第2回

『風車のある街』 —映画が伝える風車

一般社団法人 光楓座
一般社団法人 e f c o . j p
代表理事 佐藤建吉

▼地域開発映画

小説を超えて「現代」とともに未来をも表現している。

この映画は、「地域開発映画」という新しいジャンルをつくらうとして、継続的な地域創生の仕組みと映画の中で表現し、それを例として全国に広めようとする関係者の協働作品でもある。筆者も「地域開発映画」に共鳴し、これを推進している。

それは、本コラムの主題であるOfByForと密接に関連する「地域の地域による地域のため」の取り組みであるからである。このプロダクションが、同様の目的で作ろうとしている映画に『風車がある街』がある。これは、2018年の公開に向けて制作中であるので、本号では、別名の既作品を紹介したい。

▼吉永小百合&浜田光男
歌から始まり、長崎に向かう列車で、吉永が演じる三浦まり子と、浜田が演じる石倉力三、そして三浦の祖母役の北林谷栄の三人が出会うシーンがある。

三浦は、幼稚園保育いま「東京新聞」にエッセイを書いている。そのなかで、日活映画『キューポラのある街』(1962年公開、浦山桐郎監督)について述べている。60代以上の人には、吉永小百合と浜田光男の青春コンビによる映画が、その時代を風靡したこと強く記憶にあるのではないだろうか。

当時の吉永は、瑞々しく、明るく成長する時代であり、また日本自体が貧困と混乱の状況下で高度経済成長が進行する時代であった。さて二人の青春コンビの作品に『風車のある街』(1966年公開、森永健次郎監督)がある。同じく日活映画である。この作品は、風車の国、オランダで撮影された。冒頭、映画は吉永の歌から始まり、長崎に向かう列車で、吉永が演じる三浦まり子と、浜田が演じる石倉力三、そして三浦の祖母役の北林谷栄の三人が出会うシーンがある。

私は、千葉大学で風車の講義をしていた時代の購入した。今回、また全編を通して見たが、吉永と浜田、そして北林の演技は、独特の魅力があり、50年を経た現在から見ても、その演技には、確かな持続可能性がある。映画ではKLMオランダ航空や森永チーズなどが名で登場し、吉永が木靴を履いたり、オランダの民族衣装を着て歩くなどの、現地紹介がほほえましい。それにも増して、石倉とともに登場する干拓地の堤土手の現地の映像は、当時では驚きの迫力シーンであったと思える。

映画の中で吉永がいう有名な格言、「神は海を造ったが、オランダ人は陸を造った」は、これも当時は衝撃的であったのではないかと思う。浜田もいう、「東京湾の干拓は、やればできるのに、やらなければなんだ」は、彼自身の挑戦心の表

である。この面では、川端の



吉永小百合と浜田光男の青春コンビによる「風車のある街」

▼地域開発映画

この映画は、「地域開発映画」という新しいジャンルをつくらうとして、継続的な地域創生の仕組みと映画の中で表現し、それを例として全国に広めようとする関係者の協働作品でもある。筆者も「地域開発映画」に共鳴し、これを推進している。

それは、本コラムの主題であるOfByForと密接に関連する「地域の地域による地域のため」の取り組みであるからである。このプロダクションが、同様の目的で作ろうとしている映画に『風車がある街』がある。これは、2018年の公開に向けて制作中であるので、本号では、別名の既作品を紹介したい。

▼吉永小百合&浜田光男
歌から始まり、長崎に向かう列車で、吉永が演じる三浦まり子と、浜田が演じる石倉力三、そして三浦の祖母役の北林谷栄の三人が出会うシーンがある。

三浦は、幼稚園保育いま「東京新聞」にエッセイを書いている。そのなかで、日活映画『キューポラのある街』(1962年公開、浦山桐郎監督)について述べている。60代以上の人には、吉永小百合と浜田光男の青春コンビによる映画が、その時代を風靡したこと強く記憶にあるのではないだろうか。

当時の吉永は、瑞々しく、明るく成長する時代であり、また日本自体が貧困と混乱の状況下で高度経済成長が進行する時代であった。さて二人の青春コンビの作品に『風車のある街』(1966年公開、森永健次郎監督)がある。同じく日活映画である。この作品は、風車の国、オランダで撮影された。冒頭、映画は吉永の歌から始まり、長崎に向かう列車で、吉永が演じる三浦まり子と、浜田が演じる石倉力三、そして三浦の祖母役の北林谷栄の三人が出会うシーンがある。

私は、千葉大学で風車の講義をしていた時代の購入した。今回、また全編を通して見たが、吉永と浜田、そして北林の演技は、独特の魅力があり、50年を経た現在から見ても、その演技には、確かな持続可能性がある。映画ではKLMオランダ航空や森永チーズなどが名で登場し、吉永が木靴を履いたり、オランダの民族衣装を着て歩くなどの、現地紹介がほほえましい。それにも増して、石倉とともに登場する干拓地の堤土手の現地の映像は、当時では驚きの迫力シーンであったと思える。

映画の中で吉永がいう有名な格言、「神は海を造ったが、オランダ人は陸を造った」は、これも当時は衝撃的であったのではないかと思う。浜田もいう、「東京湾の干拓は、やればできるのに、やらなければなんだ」は、彼自身の挑戦心の表

である。この面では、川端の

である。この面では、川端の

▼映画に描かれた映画

風車が映画に描かれていた作品は、いくつもあ

いる。私はずうした映画の何点かのビデオやDVDを所有している。私の関心は、映画で描かれる風車の登場シーンである。従来、TVのCM、新聞の広告、そしてインタネ

間のHPなどにおいて、風車は環境の代名詞としての背景のシンボルであった。それでは、風車は回転しているかどうかは問わず、背景としての風車、すなわちシルエツトとしてであった。いま風車は、こうした背景としての風車から、実像としての風車へ変身しなければならぬ。その姿こそが実像であり、美しい。「地域開発映画」の中の風車では、そうした実像が伝わるようにしたい。

間と地域のOfByForのサムシングとしての対象である。風車の「社会受容性」を今後も取り上げたいが、それは、風力発電を自分のものとするOfByForの共通認識である。

風車は、粉挽き風車でも、揚水風車でも、発電風車でも、その稼働している姿こそが実像であり、美しい。「地域開発映画」の中の風車では、そうした実像が伝わるようにしたい。

間と地域のOfByForのサムシングとしての対象である。風車の「社会受容性」を今後も取り上げたいが、それは、風力発電を自分のものとするOfByForの共通認識である。

風車は、粉挽き風車でも、揚水風車でも、発電風車でも、その稼働している姿こそが実像であり、美しい。「地域開発映画」の中の風車では、そうした実像が伝わるようにしたい。

間と地域のOfByForのサムシングとしての対象である。風車の「社会受容性」を今後も取り上げたいが、それは、風力発電を自分のものとするOfByForの共通認識である。

風車は、粉挽き風車でも、揚水風車でも、発電風車でも、その稼働している姿こそが実像であり、美しい。「地域開発映画」の中の風車では、そうした実像が伝わるようにしたい。

連載・イベント